

祈りは人を育てる

塩野和夫

はじめに

西南学院は2016（平成28）年春に創立100周年を迎える。順調な日々だけではなかった100年を学院はどのように歩んできたのか。それを特色づけるものは何か。

『継承されるキリスト教教育－西南学院創立100周年に寄せて－』（九州大学出版会、2014）は学院を導いた源流に祈りがあるとし、「あとがき」に一つの詩を披露している¹⁾。

学び舎に 人よ育てと 熱き祈り
学院に響く 百年の時を超えて

「あとがき」によると、祈りは人を育てる力であっただけでなく、教育現場における多様性を結ぶきずなともなっている。

西南学院と祈りについての主張はおそらく誤りではない。しかし、この認識は詩的なあるいは学院史への直観に基づくものであって、歴史学的な検証を経ていない。したがって、両者の関わりは学問的には未知の状態のままにおかれている。

1) 参照、塩野和夫「あとがき」（『継承されるキリスト教教育－西南学院創立100周年に寄せて－』333-336頁）

そうであるならば、西南学院と祈りにはどのような関わりがあるのか。本稿は学問的な方法論を用いてこの課題と取り組む²⁾。

1 西南学院と祈り

(1) キリスト教信仰と祈り

キリスト教信仰は祈りにおいて呼吸する。キリスト教徒は祈り（聖書に聴き、神への呼びかけ・感謝・讚美・願いを内容とする）によって神との対話を生きる道へと招かれている。

1979（昭和54）年4月から2年間、日本キリスト教団大津教会で伝道師として働いた。教会では早天祈祷会が月曜日から金曜日まで毎朝6時から1時間行われていた。祈りを共にした仲間の一人に高槻（恒子）のおばあちゃんがいる。当時、80歳を越えていた彼女の口からしばしば聴かされた祈りの言葉はこうである。

神さまはわたしから一つまたひとつ奪っていかれる。

目は見えにくくなりました。

耳は聞こえにくくなりました。

足もすっかり弱りました。

けれども、わたしは神の御名を讚美します。

高槻のおばあちゃんの言葉は理屈ではない。祈りの生活から生み出された信仰の証言であり、彼女の人生が祈りによって形成されてきた真実を語っている。参加者はおばあちゃんの祈りに合わせて、心から「アーメン！」と唱和した。

60歳を越えて元気だった安原富美さんは何ごとにも積極的に教会活動に参加

2) 近代日本のキリスト教教育において教育者のスピリチュアリティ（霊性）がそれぞれの仕方で教育現場の環境を生み出していたことを論じた著作がある。

堤ともみ『スピリチュアリティが拓く教育の可能性―近代日本のキリスト教教育研究』2012年

しておられた。香里教会の餅つき大会で、彼女と息を合わせて餅をついた日が懐かしい。そんな安原さんから1998（平成10）年正月に受け取った年賀状には、90歳を越え身体が思うように動かなくなられた時の思いを記してあった。

量り知れない主の恵みを覚えて
心より神に感謝いたします。
段々と形ある奉仕はしにくくなりましたから、
目に見えない奉仕
祈りの生活を深めようと思っています。

身体が不自由になった日の素直な思いを記した文面から知らされる一つの真実がある。それは元気で教会奉仕に励まれた日々に、祈りは彼女と共にあった。だから年をとり不自由になられた時に、「祈りの生活を深めよう」と思えたのである。安原さんにとってもキリスト教信仰とは祈りの生活であり、祈りに支えられる日々であった。

祈りは人を支え、生かし、育てる。高槻のおばあちゃんや安原さんの生涯は、一人ひとりの生活に働きかける祈りの力を語っている。

(2) キリスト教教育と祈り

キリスト教教育を標榜する西南学院において、祈りは教育事業に生命を吹き込む霊性（スピリチュアリティ）である。だから、100年の歴史を一貫して学院に学ぶ生徒・学生のため、教育事業を担う教員・職員のため、そして西南学院のため、祈りが捧げられてきた。祈りによってキリスト教教育は基礎づけられ、教育現場も人格的な成長の場として形成されてきた。ところで、祈りとキリスト教教育との関係は決して自明の事柄ではない。

まず、100年の歴史におけるキリスト教教育に対する認識の変化である。キリスト教教育の柱であるチャペルについて、L. K. シート院長（院長在任期間 1996-2004）は「チャペルは教育事業である」と主張しておられた。学

校法人と宗教法人の違いを自覚した見解によれば、「チャペルは教育的影響を与えることを目的とする」。それに対して「教育とは何よりも信仰者として生きること」を目的にしたので、「チャペルに厳格な」創立者 C. K. ドージャーが「チャペルは宗教行事か教育行事か」と意識したとは考えられない。チャペルに対する両者の見解の相違は、西南学院100年の歴史におけるキリスト教教育に対する理解の変化を語っている。

100年間の教育現場では事件と呼ぶべき出来事もいくつか起こっている。たとえば、1928（昭和3）年の全学ストライキから発生した「日曜日問題」である。あの時、どのような立場であっても関係者は心を熱くした。教員も学生も心を燃やしながらか祈った。その祈りが建学の精神へと結晶していく。しかし、日曜日問題をめぐる論考はあっても、それを祈りととの関わりから取り上げた考察はない。学園紛争に直面した E. B. ドージャーは1969（昭和44）年4月に悲痛な経験をして帰らぬ人となる。あの出来事においても、ドージャーを根底から支え教育現場に立たせたのは祈りの力であった。しかし、学園紛争の研究はあっても、激動する学院を支えた祈りを考察した論考はない。100年の歴史を経て、西南学院の教育現場は祈りととの関わりから解き明かされる日を待ち望んでいるに違いない。

教育事業は展開を特色とする。事業の拡大は展開に認められる基本的な要素である。戦後の西南学院は中学校・高等学校を開設（1947・48年）し、舞鶴幼稚園・早緑子供の園を迎え入れて（1950年）組織を拡大した。大学を設立する（1949年）と、学部学科を増設し教育環境も充実させた。2000年以降では、中学校・高等学校を百道浜校地へ移転（2003年）し、跡地に法科大学院を開設（2004年）、新大学院棟を建設（2005年）、大学博物館も設置（2006年）した。百道浜校地には小学校を設立（2010年）する。しかし、拡大だけが事業の展開ではない。戦時体制下にあっては体制への対応を求められ、キリスト教教育に厳しい制限を受けた。学園紛争においても、キリスト教教育が問われた。このような事業展開の時期は祈りが熱く捧げられた日々でもある。学院にとって祈らざるを得ない状況におかれていたからである。

したがって、西南学院の100年は祈りによって特色づけられる。しかも、学院のキリスト教教育と祈りとの関わりは多様な側面を持つ。事柄に即しつつ考察するためにどのような研究方法があるのか。

(3) 方法論

西南学院における祈りとキリスト教教育の関わりにはいくつかの特色があった。研究方法にはこれらへの適切な対応が求められる。

まず100年の歴史における変化への対応であり、これについては時期区分が有効である。同質の内容を持った時期ごとに分け、各時期で祈りとキリスト教教育の関係を考察する。具体的には『継承されるキリスト教教育』における試論³⁾を用いる。時期区分と各時期に典型的な教育者は次の通りである。

第1期 創設期 1916（大正5）年－1945（昭和20）年

C. K. ドージャー（1879－1933）

M. B. ドージャー（1881－1972）

G. W. ボールデン（1881－1967）

M. L. ボールデン（1882－1968）

水町義夫（1885－1967）

波多野培根（1868－1945）

杉本勝次（1895－1987）

第2期 継承期 1946（昭和21）年－1970（昭和45）年

W. M. ギャロット（1910－1974）

E. L. コープランド（1916－2011）

E. B. ドージャー（1908－1969）

河野貞幹（1901－1966）

古賀武夫（1904－1992）

伊藤俊男（1901－1977）

3) 参照、塩野和夫「西南学院の教育者群像－「与える幸い」を継承した人たち」（『継承されるキリスト教教育－西南学院創立百周年に寄せて－』3-50頁）

第3期 展開期 1971（昭和46）-2002（平成14）年

C. L. ホエリー（1922-2014）

L. K. シート（1938- ）

村上寅次（1913-1996）

田中輝雄（1930-2009）

尾崎恵子（1925- ）

第4期 充実期 2003（平成15）年-2016（平成28）年

次に祈りと教育事業との生きた関係を分析する方法である。ところで「祈りは神にのみ集中すべきである」という精神性に基づくため、祈りそのものは人の目を避ける特徴がある⁴⁾。したがって、祈りと教育現場あるいは教育事業の関わりも直接には目に見える形を取らない。ここに方法論的な難しさがある。形や数値で計ることのできないスピリチュアルな事象を如何にして研究対象とできるのか。E. トレルチによると、歴史的方法是「蓋然性の判断」「類比の意味」「歴史的な事象の間に生じる関連性」を基本的な方法とする⁵⁾。これら3点の中で「歴史的認識の可能性に関する原理」である「類比」に注目したい。キリスト教においてイエスは信仰の対象であるとともに、信仰生活の規範である。したがって、福音書は祈るイエスや祈りに関するイエスの教えを記しているが、マルコ福音書1章35-39節は祈るイエスの生活を簡潔にまとめている。そこでこの個所の釈義を踏まえて、イエスの祈りとの類比により西南学院の歴史を考察したい。トレルチは現在社会における様々な経験との類比によって歴史的な事象の認識を可能であると示した。それに対して本稿は信仰生活の模範であるイエスとの類比によって西南学院史の各時期を分析する。

研究方法に関連してさらに検討すべき事柄がある。キリスト教教育の担い手についてである。西南学院のキリスト教教育は教育現場で責任を負う人たちに

4) 参照、塩野和夫「キリスト教教育と祈り」（塩野和夫、前掲書、283-292頁）

5) 参照、塩野和夫「基本的方法としての歴史的思维—エルンスト・トレルチの歴史的思维を手がかりとして—」（『日本組合基督教会史研究序説』123-128頁）

よって具体化されている。それでは担い手は誰なのか。この問いはキリスト教信仰を基準にすると、大きく2つの立場に分かれる。

- 1 学院のキリスト教教育はキリスト教徒を中心に担われている。
- 2 学院のキリスト教教育はすべての教職員によって担われている。

本稿は2の立場に立って論考を進める。

2014年度最後の週報「使者」（西南学院大学 Vol. 41, No. 32, 2015年1月19日）に寄稿されたのは、福田靖先生（文学部外国語学科英語専攻教授）である。「出立の準備」と題したメッセージは次の通り結ばれている。

「建学の精神」は、私たちのうぬぼれた心を諫め、謙虚な気持ちになり、思いやりの心を持つことの大切さを教えてください。このような西南スピリットは脈々と受け継がれ、学院のすべての営みの中に生かされているように思います。人の話に耳を傾け、学ぶ心を持つことによって、この精神に触れることができます。長い人生を支えるかけがえのない宝物を若い時期に見出すことができれば、これから始まる旅の大きな備えになるのではないのでしょうか。

福田先生はキリスト教徒ではない。しかし、「出立の準備」は先生が40年を越える西南学院の現場において西南スピリットをもって教育活動に従事されてきた事実を雄弁に語っている。

近年におけるスピリチュアリティ（靈性）の使用傾向をめぐる動向⁶⁾も2の立場を支持する。また従来、宗教界に限定されていた「靈性」が最近では広く用いられている。すなわち、一般人に対しても靈性が注目され、彼らの日常生活をスピリチュアルな次元から考察する。このような研究動向は研究対象としてキリスト教教育に関わる担い手を全ての教職員に広げる可能性を支持している。

6) 世界健康機関（WHO）は1998年に「健康」の定義を「肉体的（physical）、精神的（mental）、靈的（spiritual）、社会的（social）に完全な状態」と定義している。

2 マルコ福音書第1章35～39節の釈義

マルコ福音書第1章35～39節を釈義するにあたって、意図を明確にしておく必要がある。福音書研究で通常行われるように先行研究を踏まえて新しい見解を打ち出すのではなく、イエスの祈りの生活とりわけ祈りと活動との関わりを中心に釈義し、それとの類比によって西南学院史を検討するのが目的である。したがって、先行研究への言及は必要な範囲に留めて、ギリシャ語原典⁷⁾に基づく内容把握に努める。

(1) 私訳

マルコ福音書第1章35-39節の釈義にあたって、私訳を行う。なお、訳文は内容に応じて3つに区分している。

(祈り)

35節 そして¹⁾早朝まだ暗いうちに、イエスは起きて出て行き、寂しい場所に着くと、そこで祈っておられた²⁾。

7) ギリシャ語原典は下記を用いた。

Kurt Aland, Matthew Black, Carlo M. Martini, Bruce M. Metzger, Allen Wikgren (ed.), *The Greek New Testament*, United Bible Societies, 1968, Second Edition.

日本語訳聖書は下記を参照した。

『聖書』日本聖書協会、新約聖書 1954、旧約聖書 1955 (「口語訳」と略記する)

『新改訳 聖書』日本聖書刊行会、1970 (「新改訳」と略記する)

『新共同訳 聖書』日本聖書協会、1992 (「新共同訳」と略記する)

註解書は下記を参考にした。

田川健三『マルコ福音書 上巻』現代新約註解全書、新教出版社、1972 (「田川」と略記する)

E. シュヴァイツァー、高橋三郎訳『マルコによる福音書』NTD 新約聖書註解、NTD 新約聖書註解刊行会、1976 (「シュヴァイツァー」と略記する)

L. ウィリアムソン、山口雅弘訳『マルコによる福音書』現代聖書註解、日本キリスト教団出版局、1987 (「ウィリアムソン」と略記する)

川島貞雄「マルコによる福音書」『新共同訳 新約聖書註解 I』日本キリスト教団出版局、1991 (「川島」と略記する)

(計画)

36節 すると、シモンおよび彼と共にいた者たちがイエスを探し求め^[1]、

37節 彼を見つけ出して、彼らはイエスに「みんながあなたを探しています」と言った。

38節 そこで、イエスは彼らに言われた。「近くの他の町々にも行って、ここでも教えを宣べ伝えよう^[4]。そのためにわたしは出て来たのである」。

(活動)

39節 そして、ガリラヤ全土の諸会堂に行って、教えを宣べ伝え、悪霊を追い出された^[5]。

コメント

- [1] 35節の冒頭にある **Και** を「そして」と訳した。前の段落（マルコ I 章 29-34節）との内容的な連続性を示すためである。口語訳・田川訳・新共同訳に訳語はない。新共同訳は「さて」としている。シュヴァイツァー訳が「そして」である。
- [2] **προσηυχετο** を「祈っておられた」とした。直訳すると敬語は入らない。（田川訳）しかし、弟子との関係を考慮して敬語表現にした。口語訳・新改訳・新共同訳・シュヴァイツァー訳は敬語表現を採用している。
- [3] **κατεδιωξεν** を「探し求め」と訳した。口語訳「あとを追って」、新改訳「追って来て」、田川訳「追いかけて」、新共同訳「後を追ひ」、シュヴァイツァー訳「後を追って」である。しかし、ギリシャ語原語には「熱心に探した」という意味があるので、そのニュアンスを入れた。
- [4] **κηρυσσω** を「教えを宣べ伝えよう」と訳した。ギリシャ語原語には「宗教的真理を知らせる」という意味があり、それを生かした。
- [5] **δαιμονια εκβαλλων** を「悪霊を追い出された」と訳した。ギリシャ語原文では「教えを宣べ伝え」と並列させて書かれているので、その特色を出すようにした。

(2) 積義

1) 祈り

35節はイエスの祈りを記している。

思いを集中して神に祈るために、人目を避ける必要⁸⁾がある。そこで、「早朝まだ暗いうちに、イエスは起きて出て行き、寂しい場所に着くと、そこで祈っておられた」。田川は「激しい活動のあとでイエスが行って休む場所が荒野なのだ」と指摘する。ウィリアムソンは二つの場面（マルコ福音書6章46節、14章32節）と関係づけることにより、マルコ福音書における「ひとり祈るために退く」イエス「理解の助けになる」とする。

祈りの内容は分からない。しかし、主要な要素にイエスの計画（36-38節）があり、彼の行動（39節）とも関わっていたと推測される。したがって、「そのためにわたしは出て来たのである」（38節）という自意識は祈りにおいて自覚された。「近くの他の町々にも行って、そこでも教えを宣べ伝えよう」（38節）という計画もまた、祈りにおいて具体的に考えられた。シュヴァイツァーは祈りが「イエスの奉仕活動に本質的に付随する」とし、祈りによって「彼の奉仕は過度の多忙に陥ることからも、怠惰に陥ることからも守られた」とする。

マルコ福音書1章35-39節はイエスの祈り・計画・活動を一つにまとめて報告する。祈りに裏づけられた計画と活動はイエスの祈りの内容を垣間見させている。

2) 計画

36-38節はイエスの計画を記す。ただし、祈りのうちに整えられた計画は弟子たちの無理解に基づく行動によって引き出された。

イエスの祈りは中断された。「シモンおよび彼と共にいた者たちがイエスを探し求め、彼を見つけ出して、彼らはイエスに『みんながあなたを探しています』と言った」（36-37節）からである。弟子たち（シモンおよび彼と共にい

8) イエスは祈る時に人目を避けることを教えている。参照、マタイ福音書6章5-15節、ルカ福音書11章2-4節

た者たち)の無理解は、「奇跡行為者としてのイエスの大きな人気」(川島)に関心を奪われていたために生じた。しかも、弟子集団の無理解は繰り返される。マルコ福音書において「シモンを中心とするグループとして見られている弟子たちの無理解という主題がここではじめて現れる」(シュヴァイツァー)からである。

弟子たちを理解する上で欠かしてはならない重要なもう一つの要素がある。イエスが彼らを弟子として招かれた事実である。(マルコ福音書1章16-20節)だからたとえ「シモンおよび彼と共にいた者たち」が無理解であったとしても、イエスは彼らを弟子として受け入れておられる。そして、祈りに基づく計画と活動を共に担う日常を通して、弟子集団がイエスの祈りを共有できるまで待たれた。一方、弟子たちは早朝から一人でイエスが祈っておられたことを知っていた。それにもかかわらず、イエスを探したのはイエスの招きを受けていたからである。招きによって、たとえ誤解であったとしても、弟子たちにはイエスの共働者としての自覚があった。だからこそ、彼らは「イエスを探し求め」た。

「その誤った動機に対して、イエス到来の真の意味が啓示される」。(田川)すなわち、「イエスは彼らに言われた『近くの他の町々にも行って、そこでも教えを宣べ伝えよう。そのためにわたしは出て来たのである』」。(38節)イエスは祈りのうちに秘めていた計画を明かされる。共に計画を担う弟子たちだからである。

3) 活動

39節はイエスの活動を記している。

資料の混同が「ガリラヤ全土」(39節)と「近くの他の町々」(38節)にはある。これについて田川は「この個所はやはりマルコが何らかの伝承素材を利用している」。「……けれども他方、この文章はかなり一般的な『まとめの句』に近い体裁をとっているし、どこまでが伝承でどこまでが編集なのか区別がつかない」としている。

35節冒頭の「そして」が29-34節との連続性を確保していたように、35-38節はカファルナウム近郊におけるイエスの活動を伝えている。これは具体的な出来事に基づく伝承である。それに対して39節はマルコによる編集句で、ガリラヤ全土で展開されたイエスの宣教活動をまとめている。つまり1章35-39節でマルコは具体的なイメージを焦点に据えながら(35-38節)、ガリラヤ地方における活動をまとめている(39節)。

イエスが活動を始められた頃とガリラヤ全土に展開された時期とでは決定的な変化が弟子たちに起こっている。当初、無理解であった彼らがイエスの祈りを主体的に担うようになっていたという変化である。39節で「教えを宣べ伝え」「悪霊を追い出された」のはイエスである。これは初期の状況を反映している。ところが、イエスは「教えを宣べ伝え」「悪霊を追い出す権能を持たせるため」に12弟子を選び(マルコ福音書3章13-29節)、彼らを派遣された(マルコ福音書6章6節b-13節)。この時にはイエスの活動は弟子集団によっても担われ、イエスの祈りが彼らにも共有されている。

イエスと共に歩む日々はスピリチュアルな成長を与える。だから、たとえ無理解であってもイエスは弟子たちを見守り続けられた。イエスの祈りのうちにあって彼らは祈りを担う者へと変えられていった。

(3) 類比モデルの考察

類比という研究方法を用いて西南学院の各時期を検討するために、マルコ福音書1章35-39節の考察を進めてきた。イエスの祈りに関する全体像は「私訳」と「釈義」によって解釈した。これまでの作業で明らかにされた成果を踏まえて、類比の基準モデルを抽出したい。モデルは西南学院史を検討する際の規範となる。その事情を考慮しつつ、イエス・弟子集団・群衆に分けて考える。

1) イエス

イエスは祈りの人である。祈りにおいてたえず神と対話して安らぎ、本来の自己に立ち戻られた。

マルコ福音書1章35-39節は祈りをめぐる対照的なイエスの判断と行動を描き出していた。一つは消極的な行動である。たとえば、「御後に従おうとはせず、ただ感激して賞讃する人々」(シュヴァイツァー)や「奇跡を行うことによって群衆の機嫌をとるために、シモンや他の者たちと一緒に戻ろうとする誘惑」(ウィリアムソン)を警戒して避けられた。イエスはそこに祈りの生活から引き離そうとする力が働いているのを見抜かれた。問題は「感激した群衆や高揚した弟子集団に働きかけていた力や誘惑とは何なのか」⁹⁾である。

他方、祈りは積極的で力強いイエスの活動を生み出した。祈りはイエスに自己回復の場を提供しただけでなく、神の国を宣教する使命をも確認させた。だから、祈りにおいて具体的な宣教計画「近くの他の町々にも行って、そこでも教えを宣べ伝えよう」(38節)を立案すると、精力的に活動に従事し「ガリラヤ全土の諸会堂に行って、教えを宣べ伝え、悪霊を追い出された」(39節)。したがって、ガリラヤ全土で展開された活動の背後にはイエスの祈りがある。なお「教えを宣べ伝え」際には会衆が、「悪霊を追い出された」場合には病める一人ひとりがイエスのスピリチュアルな対象とされている。

祈りの人イエスには教育事業に取り組む西南学院の規範がある。「西南よ、キリストに忠実なれ！」という建学の精神は、マルコ福音書1章35-39節から読み解くと「ダイナミックなイエスの祈りに絶えず学ぶように教えている」と理解できる。

2) 弟子集団

弟子集団の原点はイエスの祈りに学びながら、宣教活動を共に担うようにと招かれた事実にある。

ところで、マルコ福音書1章35-39節はイエスの祈りを分かろうとしない弟子たちの姿を描き出していた。彼らの無理解は「ただ感激して賞讃する人々」

9) L. ウィリアムソンは「マルコ1:35に見られる『人里離れた所』への言及は、……プロローグ(1:1-13)における荒野の状況設定、特に誘惑物語のそれを思い出させる」としている。L. ウィリアムソン、前掲書、101頁。

(シュヴァイツァー) や「奇跡行為者としてのイエスの人気」(川島) に心を奪われ、「群衆の機嫌をとる」(ウィリアムソン) 行為に走ろうとした動機や「イエスを自分達のみの主としてとどめておこう」(田川) とする利己的な意識として了解される。イエスを祈りの生活から引き離そうとする力は弟子たちにも働きかけていた。

そんな弟子たちにイエスは「近くの他の町々にも行って、そこでも教えを宣べ伝えよう」(38節) と宣教計画をあかし、彼らを引き連れて「ガリラヤ全土の諸会堂に行って、教えを宣べ伝え、悪霊を追い出された」(39節)。無理解な弟子集団はそれを理由として排除されることはなかった。むしろイエスの祈りと期待のうちに置かれていたことが彼の言葉と行動から分かる。やがて弟子たちもイエスと共にガリラヤ全土を回り、イエスの祈りに学びながら「教えを宣べ伝え」「悪霊を追い出す」活動に従事するようになる。

弟子集団との類比から西南学院の教育事業とそれを担う教職員を分析できる。弟子たちがそうであったように西南学院もイエスの祈りの元に置かれ、イエスを模範として内なる祈りに導かれて力に満ちた教育活動に従事することを期待されている。

3) 群衆

群衆がマルコ福音書1章35-39節に直接登場することはない。けれども、2通りの仕方で大きな存在感を示している。

1つは弟子たちがイエスに語った「みんながあなたを探しています」(37節) に出てくる「みんな」である。ここにおける群衆は「奇跡行為者としてのイエス」(川島) に「ただ感激して賞讃」(シュヴァイツァー) し、彼らの間の大きな人気は弟子たちを「群衆の機嫌をとる」(ウィリアムソン) ようにと動かした。イエスはしかし、群衆の機嫌をとったり弟子集団の誘いにのって行動することはなかった。ここでの問題はイエスに対する群衆の評価の質であり、それは物質的な価値判断だと考えられる¹⁰⁾。

ところが、同じ群衆に対してイエスは「近くの他の町々にも行って、そこで

も教えを宣べ伝えよう。そのためにわたしは出て来たのである」(38節)と言われ、「ガリラヤ全土の諸会堂に行つて、教えを宣べ伝え、悪霊を追い出された」(39節)。祈りに基づくイエスの計画と活動の対象は群衆である。だから、彼の活動において群衆はイエスとスピリチュアルな出会いを経験した。

群衆との類比から検討できるのは西南学院に学ぶ生徒と学生である。彼らの多くは社会的な評価から西南学院に入学する。しかし、学院においては教職員とのスピリチュアルな経験を通して人間として豊かに育つことを期待されている。

3 祈りから読み解く西南学院100年の歴史

西南学院史の4時期「1 創設期(1916-1945)」「2 継承期(1946-1970)」「3 展開期(1971-2002)」「4 充実期(2003-2016)」を、マルコ福音書1章35-39節が記すイエスの祈りとの類比から考察する。その際に、マルコ福音書が「祈り・計画・活動」を1つのまとまりをもった事柄として描いていた事実に注目したい。西南学院の教育事業についても、「祈り・計画・活動」を一連の出来事として捉えて分析する。

(1) 創設期(1916-1945)

1) 概観

私立西南学院は1916(大正5)年に男子中学校を創立し、21(大正10)年には高等学部(文科・商科)を設け、23(大正12)年に神学科を増設、39(昭和14)年には商業学校を設立した。このようにして、学院は創設期に順次規模を拡大している。

その時に大きな問いを投げかける事件が発生した。日曜日問題である。日曜日の運動競技試合出場許可を求めて、1928(昭和3)年2月に高等学部でスト

10) イエスの教えに「神と富」のたとえ(マタイ福音書6章24節)がある。群衆のイエスへの評価には富に連なる内容がある。

ライキが起こる。解決策を提案するために学院関係者で組織した日曜日委員会の答申は30（昭和5）年5月に提出される。宣教師によるミッション会議も同年11月に意見書を出した。理事会は日曜日の試合出場禁止の原則を徹底するように求めたミッション会議の意見書に沿った決定を下す。

1930年代以降に強まる戦時体制下に生じた軋轢がある。学院は体制に対応しながらも、キリスト教学校として苦悩の道を歩んだ。

2) 教育活動

創設期の教育活動として、松井康博『西南学院高等学部文科 恩師物語 大正12年-昭和2年』から2か所を引用する。松井は1923（大正12）年4月に旧西南学院高等学部文科へ入学、27（昭和2）年3月に卒業している。

まず引用するのは23年4月の入学式におけるC. K. ドージャーの式辞である¹¹⁾。ドージャーは西南学院の教育方針を明確に語っている。

西南学院は私がたてたのではなく、キリストが私にたてることを命じ給うたのである。日本の将来を背負う大切な青年諸君を教育するために、西南学院は存在している。それ故、この学院の教育は終始キリスト教主義である。毎日礼拝があり、また聖書の授業も一週一回ある。学生は酒も煙草ものではない。私共の身体は神様の住まれるところであるから、即ち神の宮であるから。ご入学のお祝いと共に、学院の教育の中心を申し上げ、知識の習得のみではなく、人格ある紳士となって社会に出てもらいたい。

次に創設期の教育現場の一面を語っている伊藤祐之に関する叙述である。真摯に宗教的真實を求めた姿勢は学生に対する無言の指針となっていたであろう¹²⁾。

11) 参照、松井康博「(1) C. K. ドージャー先生」(『西南学院高等学部文科 恩師物語 大正12年-昭和2年』3-5頁)

12) 松井康博「(11) 伊藤祐之先生」(『西南学院高等学部文科 恩師物語 大正12年-昭和2年』34-37頁)

先生は、文一の時私共に経済原論を講ぜられ、教室の天井を見上げて、すき通った元気のよい声でノートを読まれて進まれたので、私共はこれを筆記して最後の質問をしたのであった。……当時先生は人生の悩みをもっておられたようで、高僧やすぐれた学者等に人生について、色々とお話をきいておられたと思う。先生はキリスト者で、よく聖書をよまれ、新約はもちろん旧約に通じられ、福岡バプテスト教会の礼拝に出席されていたが、洗礼は受けられなかった。真理を追究される先生は、はっきり自分の悩みが解決されるまでは、安易にバプテスマを受けられなかった。人生とは何か。それは先生の心のなかにある、唯物論と唯心論のたたかいであった。

3) 類比による分析

創設期の教育活動を語る2つの資料をマルコ福音書1章35-39節における弟子集団の描写を中心に類比して検討する。

まずC. K. ドージャーの式辞を弟子たちの行動と比較すると、明確に浮かび上がってくる特色がある。西南学院の存在理由・教育方針、それと教育の目的に対する確固とした自覚である。当初の弟子集団と比べてこのような特色が出てくるのは、ドージャーが祈りの生活を深めていた信仰生活に拠る。

当時の伊藤祐之の立場は弟子たちと群衆の間に位置する。しかし、マルコ福音書の記す群衆と比較すると、伊藤には顕著な違いが認められる。群衆がイエスに対する物質的な価値判断によって動かされていたのに対して、伊藤はスピリチュアルな求めを強く持っていた点である。聖書は群衆的な立場にあった人でも霊的な求めを持つことにより、イエスの本質に迫った事例を記している¹³⁾。

したがって、ドージャーと伊藤のケースは創設期の西南学院が人を育てるだけの祈りに満ちた教育現場であり、学生は豊かな霊性の下に置かれていたことを語っている。ただし、戦時体制の強化によりキリスト教教育は極めて困難となった¹⁴⁾。

13) たとえば、「シリア・フェニキアの女の信仰」(マルコ福音書7章24-30節)がある。

(2) 継承期 (1946—1970)

1) 概観

継承期は軍国主義的物品の整理から始まり、1947（昭和22）年に新学制による中学校を、48（昭和23）年には高等学校を開設した。49（昭和24）年に大学学芸学部（神学・英文学・商科の三専攻）を設けると、50（昭和25）年に短期大学部を発足させた。この年には舞鶴幼稚園と早緑子供園を学院の組織に加えている。その後、大学は学部学科を増設した。他方、50年には「C. K. ドージャー記念日」と「波多野培根先生記念日」を設けて、西南学院の歴史を築き始めている。

学院に対する見解を示している資料がある。E. B. ドージャーが創立50周年の記念式典で語った式辞「世界的貢献を目指せ」¹⁵⁾である。彼は「物品がマスプロダクションによって安くなるのと同じように、人間のマスプロも、私どもの人格を低下させる」と考える。そこで、「こういうような時に、私どもは、真の教育を、西南において施したいと思う」と語る。一人ひとりの個性ある人間を育てるための教育という自覚に創設期の伝統が継承されている。

2) 教育活動

教育活動としては、南部バプテスト連盟婦人会に関係した団体の雑誌 *The*

14) 戦時体制下にあっても確固としてキリスト教教育に立ち続けた教育者がいた。波多野培根である。波多野は学生から信頼を寄せられていた。波多江一俊氏は「座談会 あの頃の学生生活を語る」で証言している。

「私が入学したのは昭和15年の4月で、支那事変も相当進んでいた頃でした。1年経って16年の春にはドーチャー先生一家はアメリカへ引揚げられ、日米関係も切迫した頃であったし、特に西南学院に対する圧迫も強くなって、落ちついて勉強出来なかった。自然学生々活も無味乾燥で面白くない様になり、学校なんか止めてしまって家に帰ろうか、と云う者もあったが、『波多野バイコンさんのござるけん』と云ってやめなかったですね。それ程波多野培根先生の学生に対して与えられた影響は大きかった。あの何にも信じることの出来ないような、混乱した緊迫した時代に我々学生は真から波多野先生を信じ、尊敬しておりました」。

「座談会 あの頃の学生生活を語る」（『*Seinan Gakuin Today and Yesterday* 創立35周年記念 1951』1951年、13-14頁）

15) E. B. ドージャー「世界的貢献を目指せ」（『西南学院70年史 下巻』70-73頁）

Window of Y. M. A. (May 1947, pp.18-19)¹⁶⁾に掲載された“A Professor’s Letter” by Sadamoto Kawano と高等学校で自主的に宗教活動を担ったゲッセマネ会の報告¹⁷⁾を取り上げる。

河野貞幹の書簡の結びは次の通りである。なお、原文は英文なので和訳している。

西南学院には2,300名の学生・生徒が学んでいます。ですからどうぞ、救いの福音を伝える貴重な機会が与えられている事実に注目下さい。

日本人は皆あらゆる事に失望し、救いの手を探し求める迷える人々にすぎません。まさに今、彼らは真の救い主を必要としているのです。多くの少年少女がキリストを救い主として受け入れている事実を喜びをもってお知らせします。

先のクリスマスに私たちは大学近くの海でバプテスマの式を執行しました。勇敢にも凍える海で数名の青年がバプテスマを受けました。私はいくつかの小包を感謝して受け取りました。送って下さった方々にご親切をどれほど喜んでいたか、そしてそれらの贈り物を届けた日本の人々が感謝していたとお伝え下さい。

私は私たちの心のうちにある願いを皆さんに伝えるためにアメリカへどうしても行きたいです。それらは、さらに多くの宣教師、教会、聖書、歌の本、教科書、そして日本における最上位級の大学のための建物です。これらのために祈って下さい。新しいキリストにある日本を築くのに力を貸して下さい。

ゲッセマネ会の報告は次の通りである。

16) Young Women’s Auxiliary (Y. M. A. と略称される) 大学生と若い独身社会人である女性を対象にした雑誌である。

17) 「自治活動としての宗教部 (ゲッセマネ会)」(『西南学院 70 年史 下巻』367-369 頁)

学校の特別伝道その他宗教行事の折に、ゲッセマネ会員が聖書朗読・祈祷に当たるなど、学校の活動にもいろいろ協力した。しかも、その活動は、校内を対象にしたものにとどまらず、社会的にも、よい証しを立てるようになっていった。たとえば、1954（昭和29）年7月には、「長崎県の北松炭田の欠食学童を救おう」と、ゲッセマネ会が中心となって呼びかけ、礼拝のうちに席上献金を、当時の金としては多額な7000円も集め、半分の3500円を朝日新聞社を通して北松炭田の欠食学童に、あとの3500円を東京三鷹の学生サナトリウム建設資金に贈っている。

3) 類比による分析

河野貞幹の書簡と初期の弟子集団を比較すると、活動対象に対する意識の違いが明らかである。弟子たちが群衆の物質的要求に心を動かされていたのに対し、河野は学生・生徒の霊的な必要に注目している。その上で具体的な要望を示して、「これらのために祈って下さい」と求めている。

ゲッセマネ会の立場はマルコ福音書における群衆と対応する。ところが、キリスト教教育に触発された彼らは物質的な事柄よりも霊的な関心に動かされている。なるほど、高等学校において彼らは少数者である。しかし、その活動は全校生徒に支えられていた。したがって、ゲッセマネ会の活動は高等学校の教育状況を伝えている。

河野貞幹の書簡とゲッセマネ会の活動は継承期の西南学院において、キリスト教教育が生きて働いていた事実を語っている。ただし、創立50周年記念会における E. B. ドージャーの式辞「世界的貢献を目指せ」は、発展していく中であっても学院は変わることなく学生・生徒一人ひとりに対するキリスト教教育に打ち込む重要性を訴えている。

(3) 展開期（1971—2002）

1) 概観

展開期に入ると1971（昭和46）年に大学院研究科の法学研究科法律学専攻

(修士課程)を開設し、72(昭和47)年の経営学研究科経営学専攻(修士課程)、74(昭和49)年の法学研究科法律学専攻(博士課程)と経営学研究科経営学専攻(博士課程)が続いた。76(昭和51)年には文学研究科英文学専攻・フランス文学専攻(修士課程)が設けられる。他方、73(昭和48)年に学院史編集室が開設され、学院史編纂作業の中核を担って86(昭和61)年に『西南学院70年史 上巻・下巻』を発行した。85(昭和60)年には児童教育学科に小学校教諭免許課程を設置し、博物館学芸員課程も設けられる。高等学校が男女共学へ移行するのは94(平成6)年で、中学校も96(平成8)年に男女共学へ移った。

展開期の西南学院に関して、E. L. コープランド院長は1980(昭和60)年の西南ファカルティ・リトリートにおける講演で現状に対しては「伝統にふさわしい教育の場であるために十分に注意するように」と忠告し、今後の方向性に関しては「人間性を尊重し、国際性を重んじ、地域社会の要請に応えるように」と助言した¹⁸⁾。

2) 教育活動

教育活動として田中輝雄「創立記念日式辞」(1995年5月11日)¹⁹⁾の一部と福田靖「出立の準備」(2015年1月19日)の全文を取り上げる。福田教授のメッセージ記載時は充実期であるが、1973(昭和48)年4月より42年に及ぶ教授の主要な活動期は展開期にあたることを考慮した。

田中院長の式辞は次の通りである。

西南学院はもちろん教会ではなく、学校であり教育機関であります。公的教育の使命と責任があります。「教育の空洞化」が言われる今日、私たちが建学の精神を忘れず、学生、生徒、園児に温かい誠意をもって接し、よき薫陶を与えるように祈り努力せねば、と思います。

18) E. L. コープランド「西南学院をよくするために」(『西南学院70年史 下巻』119-121頁)

19) 田中輝雄「創立記念日式辞(1995・5・11)」(『松の緑 青春の色』91-95頁)

先日、大学のチャペルでは「西南学院に学ぶ」という週テーマで講話がありました。森泰男先生は知識偏重の風潮の中、恐ろしい「知的エリート」が出ている今、「知識よりも知恵を」と聖書に立った話をされ、(九大の)寺園喜基先生は西南で教わった2人の先生が本当にかわいがってくださり、また「今、何を問題として考えているか」と問うてくださったことを中心に、よき師と出会ったすばらしさを語られました。このお二人の話に、私は西南での教育のあり方の大切な方向が示唆されているように感じました。

福田靖「出立の準備」の全文は次の通りである。

学生のみなさんは、将来に備えて勉強やスポーツや資格取得などに励んでおられる人も多いことでしょう。そしていい仕事に就き、豊かな生活をする、そのためにできるだけ多くの貯金をするをを目指している人も多いかもしれません。高い学歴、肩書、立派な車や家をもつことは理想的な人生のように見えますが、それらは必ずしも永遠不滅のものとは言えません。私たちは、形あるものにだけ価値を見出し、それを追求することが人生の目標であり、そのために備えることが大切であると思ひ込みがちです。

しかし本当の財産は、目に見えるものではなく、謙虚な心、思いやりの心、感謝の心、感動する心など、より普遍的で、人間的な部分にあるのではないかということに気づきます。これらは日々の生活の中で経験したり、学ぶことによって誰でも手に入れることができるものです。年をとっても衰えることがなく、人に施してもなくなることはありません。

「建学の精神」は、私たちのうぬぼれた心を諫め、謙虚な気持ちになり、思いやりの心を持つことの大切さを教えてくれます。このような西南スピリットは脈々と受け継がれ、学院のすべての営みの中に生かされているように思います。人の話に耳を傾け、学ぶ心を持つことによって、この精神に触れることができます。長い人生を支えるかけがえのない宝物を若い時期に見出すことができれば、これから始まる旅の大きな備えになるのではないのでしょうか。

3) 類比による分析

田中輝雄院長にしても福田靖教授にしてもマルコ福音書における弟子集団と比較するならば、長くイエスに従ってきた弟子に相当する。そんな2人には共通する2点がある。

一つは弟子たちを動かした群衆の物質的動機に対応する風潮への強い警戒感である。田中院長の式辞における『『教育の空洞化』が言われる今日』や「森泰男先生は知識偏重の風潮の中、恐ろしい『知的エリート』が出ている今」という状況認識に、学院を取りまく環境に対する強い警戒感が認められる。それに対して福田教授は、「学生のみなさんは、将来に備えて勉強やスポーツや資格取得などに励んでおられる人も多いことでしょう。そしていい仕事に就き、豊かな生活をする、そのためにできるだけ多くの貯金をすることを目指している人も多いかもしれません。高い学歴、肩書、立派な車や家をもつことは理想的な人生のように見えます」と西南学院に学ぶ大学生に向けて語りかけている。その内容は学生にも物質的動機が広く強く働きかけ、彼らの行動を規定するという認識を前提している。

物質的動機への注意はE.L. コープラント院長の講演における忠告「伝統にふさわしい教育の場であるために十分に注意するように」にも見られる。その内容はE.B. ドージャーが創立50周年創立記念で語った認識「物品がマスプロダクションによって安くなるのと同じように、人間のマスプロも、私どもの人格を低下させる」と重ねることができる。

共通するもう一点は西南学院の教育的伝統に対する自覚である。福田教授は誇りを込めて述べる。「『建学の精神』は、私たちのうぬぼれた心を諫め、謙虚な気持ちになり、思いやりの心を持つことの大切さを教えてください。このような西南スピリットは脈々と受け継がれ、学院のすべての営みの中に生かされているように思います」。田中院長も語っている。「私たちが建学の精神を忘れず、学生、生徒、園児に温かい誠意をもって接し、よき薫陶を与えるように祈り努力せねば、と思います」。田中院長と福田教授のメッセージに認められるもう一つの類似性は、人を育てる西南学院の精神的伝統（スピリチュアリティ）が学院の隅々にまで浸透している事実である。

(4) 充実期 (2003—2016)

1) 概観

2003（平成15）年に中学校と高等学校は百道浜校地へ移転した。跡地には04（平成16）年に法科大学院を開設し、05（平成17）年の新大学院棟竣工へと続く。06（平成18）年には中学校・高等学校旧チャペルの内部を改装して、大学博物館（ドージャー記念博物館）を設置した。07（平成19）年になると西南コミュニティセンターと西南子どもプラザを設けている。百道浜校地には10（平成22）年に西南小学校を開設し、この年100周年事業推進室も設置されている。これらはいずれも新たな教育活動の可能性を開くもので、これを充実期と呼ぶ。

2) 教育活動

充実期の教育活動として、「舞鶴幼稚園における保育の柱」と西南学院大学の「キリスト教学Ⅱを受講した学生の声」を取り上げる。

「舞鶴幼稚園における保育の柱」²⁰⁾は次の通りである。

モードを始めとして南部バプテスト女性宣教師の願いによって創立された舞鶴幼稚園には「幼な子をキリストへ」の理念と、「光の子」の理想像が受け継がれている。そこで、現在の舞鶴幼稚園の活動に焦点を当て具体的な取り組みを見ておく。

現在の舞鶴幼稚園では、保育全体の総目標を「ひかりの子」とした上で、4つの保育の柱を掲げている。入園案内には「キリスト教保育を通し、思いやりの心を培いながら、個性豊かにのびのび生きていく力を育む保育を実施」と明示し、保育の柱を説明する。

20) 堤ともみ『スピリチュアリティが拓く教育の可能性—近代日本のキリスト教教育の研究』272頁

- ①キリスト教教育：神に愛されている自分を知り、他の人たちを愛する喜びと生命の大切さを知るようになります。
- ②のびのび保育：明るくのびのび活動する中で、丈夫な心と身体を育て、楽しく仲間づくりをしていきます。
- ③統合教育：障がいをもった子どもと共に育ちあうことを目指しています。
- ④たてわり保育：年齢の異なる子どもたちが一緒にどろんこ、つくって遊ぶ活動、ごっこ遊びなどで親しく交わります。

大学で「キリスト教学Ⅱを受講した学生の声」²¹⁾は次の通りである。

キリスト教学Ⅱは、キリスト教教理について深く学んでいくところに入っていたので、最初はとても難しく感じました。何人かの神学者の思想とキリスト教の考え方について学んでいったことを通して、私はどの人の講義の時も、青年期での人との出会いや経験がどんなに人生に影響を与えるかということを感じました。青年期に過ごした環境、過ごした友人や出会った人々、考えたことなどは、その人の人格だけでなく思想形成に大きく影響を与え、その後の人生の方向を大きく変えてしまうような結果も起こり得ます。青年期とは悩んだり苦しんだりするだけでなく、たくさんの物事や知識を吸収して、人として築いていく基盤をたてるような多感な時期なのだということが、分かりました。

とても興味深かったです。当時の日本人たちのキリスト教を手がかりとして、自分自身の問題に取り組む姿勢を知り、今の自分は何か真剣に悩み、思考し、取り組んでいることがあるであろうか考えさせられました。そして、このままじゃ駄目だなと思いました。大学に来た以上、自分で行動選択し、自主的に学び、思考することが大切なのだと思います。なので、そのことに改めて気付いたので、この授業は私にとって、とても大切な授業でした。

21) 塩野和夫『継承されるキリスト教教育 — 西南学院創立百周年に寄せて —』327-328頁

3) 類比による分析

充実期の事例として取り上げた2つの資料は、西南学院の伝統を重んじて教育活動が行われている現場の様子を伝えている。

「舞鶴幼稚園における保育の柱」は、マルコ福音書1章35-39節で弟子集団を動かした動機と比較すると、いくつかの特色が浮かび上がる。まず創設者の教育理念や教育の理想を土台としている点である。その上で、それらを現代の保育に生かすために「保育の4つの柱」を掲げている。その姿からはイエスの祈りを規範としつつ教育現場に打ち込む様子を彷彿とさせる。要するに現場の教職員は人を育てる学院の伝統に学びながら、教育活動に従事している。

それに対して、「キリスト教学を受講した学生の声」は教育を受けている側からの発言である。彼らはマルコ福音書における群衆と比較できる。イエスの活動に刺激された群衆はイエスに強い関心を持ったが、それは当初物質的な動機によるものであった。学生もキリスト教教育によって刺激を受け、自分の生き方を考えている。それを群衆の動機と比較すると、よりスピリチュアルな関心といえる。したがって、このような学生の声は学院におけるキリスト教教育が生きて働いている事実を語っている。

おわりに

キリスト教を拠り所とする西南学院の教育事業をイエスの祈り（マルコ福音書1章35-39節）との類比から分析した。学院の歴史にはもっと多くの側面があるので、取り上げた事例なども極めて限定されている。当然、これだけでは学院の100年は分からない。しかし、歴史叙述が目的ではない。学院は100年の歴史においてキリスト教の精神性に生かされて人を育ててきた。したがって、その教育現場にはキリスト教の祈りに認められるスピリチュアルな力が働いている。100年に及ぶ教育現場での霊的な力の働きかけと教育活動との関わりの分析が本稿の目的である。

そこで学院史を4期に分け、イエスの祈りとの類比からそれぞれの時期を考

察した。その結果、いくつかの教育的事実が明らかになった。重要な一つは西南学院においてキリスト教に基づく教育活動が誠実に取り組まれてきた事実である。その結果100年を経た現在、学院の隅々で建学の精神を重んじた教育活動が地道に取り組まれている。もう一つ明らかになったのは、マルコ福音書で群衆を捉え弟子集団も動かした物質的な力の働きかけである。西南学院の発展に伴って、学院の内外に物質的な働きかけが強くなっている。そこで歴代院長の多くはこの力への警戒を呼びかけている。

イエスの祈りとの類比から明らかにされたのは、教育現場で地道に広がっていく祈りの働きかけと様々に働きかける物質的な動機との軋轢である。これは西南学院の歴史の一断面にすぎないが、キリスト教によって人を育てる教育事業の根源にある重要な一面でもある。西南学院はこれからも両者の軋轢の中を歩いていくであろう。そこで、人を育ててきた西南学院にふさわしい歩みが続けられることを願いつつ、創立100周年を迎えたこの時に声を大にして祈らなければならない。

学び舎に 人よ育てと 熱き祈り
学院に響く 百年の時を超えて